

昭和四十六年法律第四十号

民事訴訟費用等に関する法律

目次

第一章 総則(第一条・第二条)

第二章 裁判所に納める費用

第一節 手数料(第三条―第十条)

第二節 手数料以外の費用(第十一条―第十三条の二)

第三節 費用の取立て(第十四条―第十七条)

第三章 証人等に対する給付(第十八条―第二十一条)

第四章 雑則(第二十九条・第三十条)

附則

第一章 総則

(趣旨)

第一条 民事訴訟手続、民事執行手続、民事保全手続、行政事件訴訟手続、非訟事件手続、家事審判手続その他の裁判所における民事事件、行政事件及び家事事件に関する手続(以下「民事訴訟等」という。)の費用については、他の法令に定めるもののほか、この法律の定めるところによる。

(当事者その他の者が負担すべき民事訴訟等の費用の範囲及び額)

第二条 民事訴訟法(平成八年法律第九号)その他の民事訴訟等に関する法令の規定により当事者等(当事者又は事件の關係人をいう。第四号及び第五号を除き、以下同じ。)又はその他の者が負担すべき民事訴訟等の費用の範囲は、次の各号に掲げるものとし、その額は、それぞれ当該各号に定めるところによる。

一 次条の規定による手数料 その手数料の額(第九条第三項又は第五項の規定により選付される額があるときは、その額を控除した額)

二 第十一条第一項の費用 その費用の額

三 執行官法(昭和四十一年法律第十一号)の規定による手数料及び費用 その手数料及び費用の額

四 当事者等(当事者若しくは事件の關係人、その法定代理人若しくは代表者又はこれらに準ずる者をいう。以下この号及び次号において同じ。)が口頭弁論又は審問の期日その他裁判所が定めた期日に出頭するための旅費、日当及び宿泊料(親権者以外の法定代理人、法人の代表者又はこれらに準ずる者が二人以上出頭したときは、そのうちの最も低額となる一人についての旅費、日当及び宿泊料)及び宿泊料の額

イ 旅費

上出頭したときは、そのうちの最も低額となる一人についての旅費、日当及び宿泊料)及び宿泊料の額

(1) 旅行が本邦(国家公務員等の旅費に関する法律(昭和二十五年法律第十四号)第二条第二号に規定する本邦をいう。以下同じ。)と外国(本邦以外の領域(公海を含む。))をいう。以下同じ。)

との間のものを含まない場合においては、当事者等の普通裁判籍の所在地を管轄する簡易裁判所の主たる庁舎の所在する場所と出頭した場所を管轄する簡易裁判所の主たる庁舎の所在する場所との間の距離を基準として、その距離を旅行するときに通常要する交通費の額として最高裁判所が定める額(これらの場所が同一となるときは、最高裁判所が定める額)。ただし、旅行が通常の経路及び方法によるものであること並びに現に支払った交通費の額が当該最高裁判所が定める額を超えることを明らかにする領収書、乗車券、航空機の搭乗券の控え等の文書が提出されたときは、現に支払った交通費の額

(2) 旅行が本邦と外国との間のものを含む場合において、当該旅行が通常の経路及び方法によるものであるときは、現に支払った交通費の額(当該旅行が通常の経路又は方法によるものでないときは、証人に支給する旅費の例により算定した額)

ロ 日当 出頭及びそのための旅行(通常の経路及び方法によるものに限る。)に現に要した日数に応じて、最高裁判所が定める額。ただし、旅行が通常の経路若しくは方法によるものでない場合又は本邦と外国との間のものを含む場合には、証人に支給する日当の例により算定した額

ハ 宿泊料 出頭及びそのための旅行(通常の経路及び方法によるものに限る。)のために現に宿泊した夜数に応じて、宿泊地を区分して最高裁判所が定める額。ただし、旅行が通常の経路若しくは方法によるものでない場合又は本邦と外国との間のものを

含む場合には、証人に支給する宿泊料の例により算定した額

五 代理人(法定代理人及び特別代理人を除く。以下この号において同じ。)が前号に規定する期日に出頭した場合(当事者等が出頭命令又は呼出しを受けない期日に出頭した場合を除く。)における旅費、日当及び宿泊料(代理人が二人以上出頭したときは、そのうちの最も低額となる一人についての旅費、日当及び宿泊料) 前号の例により算定した額。

ただし、当事者等が出頭した場合における旅費、日当及び宿泊料の額として裁判所が相当と認める額を超えることができない。

六 訴状その他の申立書、準備書面、書証の写し、訳文等の書類(当該民事訴訟等の資料とされたものに限る。)の作成及び提出の費用 事件一件につき、事件の種類、当事者等の数並びに書類の種類及び通数(事件の記録が電磁的記録で作成されている場合にあつては、当該電磁的記録に記録された情報の内容を書面に出力したときのその通数)を基準として、通常要する書類の作成及び提出の費用の額として最高裁判所が定める額

七 官庁その他の公の団体の公証人から前号の書類の交付を受けるために要する費用 当該官庁等に支払うべき手数料の額に交付一回につき第一種郵便物の最低料金の二倍の額の範囲内において最高裁判所が定める額を加えた額

八 第六号の訳文の翻訳料 用紙一枚につき最高裁判所が定める額

九 文書又は物(裁判所が取り調べたものに限る。)を裁判所に送付した費用 通常の方法により送付した場合における実費の額

十 民事訴訟等に関する法令の規定により裁判所が選任を命じた場合において当事者等が選任した弁護士又は裁判所が選任した弁護士に支払った報酬及び費用 裁判所が相当と認める額

十一 裁判所が嘱託する登記又は登録につき納める登録免許税 その登録免許税の額

十二 強制執行の申立て若しくは配当要求のための債務名義の正本若しくは記録事項証明書の交付、公証人法(明治四十一年法律第五十三号)第四十四条第一項第二号の書面の交付若しくは同項第三号の電磁的記録の提供、執行文の付与又は民事執行法(昭和五十四年法律第四号)第二十九条の規定により送達すべき書類の交付若しくは電磁的記録の提供を受けるために要する費用 裁判所その他の官庁又は公証人に支払うべき手数料の額に交付又は付与一回につき第一種郵便物の最低料金の二倍の額に書留料を加えた額の範囲内において最高裁判所が定める額を加えた額

十三 公証人法第四十八条の規定により公証人がする書類又は電磁的記録の送達のために要する費用 公証人に支払うべき手数料及び送達に要する料金の額

十四 第十二号の交付若しくは付与を受け、又は前号の送達を申し立てるために裁判所以外の官庁又は公証人に提出すべき書類で官庁等の作成に係るものの交付を受けるために要する費用 第七号の例により算定した費用の額

十五 裁判所が支払うものを除き、強制執行、仮差押えの執行又は担保権の実行(その例による競売を含む。)に関する法令の定めるところにより裁判所が選任した管理人又は管財人が受ける報酬及び費用 当該法令の規定により裁判所が定める額

十六 差押債権者が民事執行法第五十六条第一項(これを準用し、又はその例による場合を含む。)の許可を得て支払った地代又は借賃 その地代又は借賃の額

十七 第二十八条の第二項の費用 同項の規定により算定した額

十八 民法(明治二十九年法律第八十九号)第三百八十五条(同法その他の法令において準用する場合を含む。)の規定による通知を書面とした場合の通知の費用 通知一回につき第一種郵便物の最低料金を書留料を加えた額の範囲内において最高裁判所が定める額

第二節 裁判所に納める費用

第一章 手数料

(申立ての手数料)

第三条 別表第一の上欄に掲げる申立てをするに、申立ての区分に応じ、それぞれ同表の下欄に掲げる額の手数料を納めなければならない。

2 次の各号に掲げる場合には、当該各号の申立てをした者(第三号に掲げる場合において消費者の財産的被害等の集団的な回復のための民事の裁判手続の特例に関する法律(平成二十五年法律第九十六号)第四十九条第二項の規定により届出消費者が異議の申立てをしたときは、その届出消費者)は、訴えを提起する場合の手数

料の額から当該申立てについて納めた手数料の額を控除した額の手数料を納めなければならぬ。

一 民事訴訟法第二百七十五条第二項又は第三百九十五条若しくは第三百九十八条第一項（同法第四百二条第二項において準用する場合を含む。）の規定により和解又は支払督促の申立ての時に訴えの提起があつたものとみなされたとき。

二 労働審判法（平成十六年法律第四十五号）第二十二條第一項（同法第二十三條第二項及び第二十四條第一項において準用する場合を含む。）の規定により労働審判手続の申立ての時に訴えの提起があつたものとみなされたとき。

三 消費者の財産的被害等の集団的回復のための民事の裁判手続の特例に関する法律第五十六條第一項の規定により債権届出の時に訴えの提起があつたものとみなされたとき。

3 一の判決に対して上告の提起及び上告受理の申立てをする場合において、その主張する利益が共通であるときは、その限度において、その一方について納めた手数料は、他の一方についても納めたものとみなす。一の決定又は命令に対して民事訴訟法第三百三十六條第一項（これを準用し、又はその例による場合を含む。）の規定による抗告の提起及び同法第三百三十七條第二項（これを準用し、又はその例による場合を含む。）の規定による抗告の許可の申立てをする場合も、同様とする。

4 破産法（平成十六年法律第七十五号）第二四十八條第四項本文の規定により破産手続開始の申立てと同時に免責許可の申立てをしたものとみなされたときは、当該破産手続開始の申立てをした者は、免責許可の申立ての手数料を納めなければならない。

（訴訟の目的の価額等）  
第四条 別表第一において手数料の額の算出の基礎とされている訴訟の目的の価額は、民事訴訟法第八條第一項及び第九條の規定により算定する。

2 財産権上の請求でない請求に係る訴えについては、訴訟の目的の価額は、百六十万円とみなす。財産権上の請求に係る訴えで訴訟の目的の価額を算定することが極めて困難なものについても、同様とする。

3 一の訴えにより財産権上の請求でない請求とその他の原因である事実から生ずる財産権上の請求

とをあわせてするときは、多額である訴訟の目的の価額による。

4 第一項の規定は、別表第一の一〇の項の手数料の額の算出の基礎とされている価額について準用する。

5 民事訴訟法第九條第一項の規定は、別表第一の一三の項及び一四の二の項の手数料の額の算出の基礎とされている額について準用する。

6 第一項及び第三項の規定は、別表第一の一四の項及び一四の二の項の手数料の額の算出の基礎とされている価額について準用する。

7 前項の価額は、これを算定することができなかつたときは、百六十万円とみなす。

（手数料を納めたものとみなす場合）  
第五条 民事訴訟法第三百五十五條第二項（第三百六十七條第二項において準用する場合を含む。）、民事調停法（昭和二十六年法律第二百一十二号）第十九條（特定債務等の調整の促進のための特定調停に関する法律（平成十一年法律第五十八号）第十八條第二項（第十九條において準用する場合を含む。））において準用する場合を含む。）又は家事事件手続法（平成二十三年法律第五十二号）第二百七十二條第三項（同法第二百七十七條第四項において準用する場合を含む。）、第二百八十五條第五項若しくは第二百八十六條第六項の訴えの提起の手数料については、前の訴えの提起又は調停の申立てについて納めた手数料の額に相当する額は、納めたものとみなす。

2 前項の規定は、民事調停法第十四條（第十五條において準用する場合を含む。）、規定により調停事件が終了し、又は同法第十八條第四項の規定により調停に代わる決定が効力を失つた場合において、調停の申立人がその旨の通知を受けた日から二週間以内に調停の目的となつた請求についてする借地借家法（平成三年法律第九十号）第十七條第一項、第二項若しくは第五項（第十八條第三項において準用する場合を含む。）、第十八條第一項、第十九條第一項（同法第七項において準用する場合を含む。）、若しくは第二十条第一項（同法第五項において準用する場合を含む。）、又は大規模な災害の被災地における借地借家に関する特別措置法（平成二十五年法律第六十一号）第五條第一項（同法第四項において準用する場合を含む。）、の規定による申立ての手数料について準用する。

（手数料未納の申立て）  
第六条 手数料を納めなければならない申立てでその納付がないものは、不適法な申立てとする。

（裁判所書記官が保管する記録の閲覧、謄写等（手数料））  
第七条 別表第二の上欄に掲げる事項の手数料は、同表の下欄に掲げる額とする。

（納付の方法）  
第八条 手数料は、訴状その他の申立書又は申立ての趣意を記載した調書に収入印紙をはつて納めなければならない。ただし、最高裁判所規則で定める場合には、最高裁判所規則で定めるところにより、現金をもつて納めることができる。

（過納手数料の還付等）  
第九条 手数料が過大に納められた場合においては、裁判所は、申立てにより、決定で、過大に納められた手数料の額に相当する金額の金銭を還付しなければならない。

2 前項の規定にかかわらず、支払督促若しくは差押処分申立ての手数料又は別表第二の上欄に掲げる事項の手数料が過大に納められた場合の還付は、申立てにより、裁判所書記官が行う。

3 次の各号に掲げる申立てについてそれぞれ当該各号に定める事由が生じた場合においては、裁判所は、申立てにより、決定で、納められた手数料の額（第五条の規定により納めたものとみなされた額を除く。）から納めるべき手数料の額（同条の規定により納めたものとみなされた額を除くものとし、民事訴訟法第九條第一項に規定する合算が行われた場合における各個の請求に係る手数料にあつては、各請求の価額に応じて案分して得た額）の二分の一の額（その額が四千円に満たないときは、四千円）を控除した金額の金銭を還付しなければならない。

一 訴え若しくは控訴の提起又は民事訴訟法第四十七條第一項若しくは第五十二條第一項の規定若しくはこれらの規定の例による参加の申出、口頭弁論を経ない却下の裁判の確定又は最初にすべき口頭弁論の期日の終了前における取下げ

二 民事調停法による調停の申立て、却下の裁判の確定又は最初にすべき調停の期日の終了前における取下げ

三 労働審判法による労働審判手続の申立て、却下の裁判の確定又は最初にすべき労働審判手続の期日の終了前における取下げ

四 借地借家法第四十一條（大規模な災害の被災地における借地借家に関する特別措置法第五條第二項（同法第四項において準用する場合を含む。））において準用する場合を含む。以下この号において同じ。）の事件の申立て、借地借家法第四十一條の事件における参加の申出（申立人として参加する場合に限る。）又はその申立て若しくは申出についての裁判に対する抗告（次号に掲げるものを除く。）の提起、却下の裁判の確定又は最初にすべき審問の期日の終了前における取下げ

五 上告の提起若しくは上告受理の申立て又は前号の申立て若しくは申出についての裁判に対する非訟事件手続法（平成二十三年法律第五十一号）第七十四條第一項の規定による再抗告若しくは同法第七十五條第一項の規定による特別抗告の提起若しくは同法第七十七條第二項の規定による抗告の許可の申立て、原裁判所（抗告の許可の申立てにあつては、その申立てを受けた裁判所。以下この号において同じ。）における却下の裁判の確定又は原裁判所が上告裁判所若しくは抗告裁判所に事件を送付する前における取下げ

4 前項の規定は、各個の請求の一部について同項各号に定める事由が生じた場合において、既に納めた手数料の全部又は一部がなお係属する請求についても納められたものであるときは、その限度においては、適用しない。同項第五号に掲げる申立てについては、同号に定める事由が生じた場合において、既に納めた手数料の全部又は一部がなお係属する他の同号に掲げる申立てについても納められたものであるときも、その限度において、同様とする。

5 支払督促の申立てについて、却下の処分確定又は支払督促の送達前における取下げがあつた場合においては、裁判所書記官は、申立てにより、第三項の規定に準じて算出した金額の金銭を還付しなければならない。ただし、前項前段に規定する場合には、その限度においては、この限りでない。

6 第一項から第三項まで及び前項の申立ては、一の手数料に係る申立ての申立人が二人以上ある場合においては、当該各申立人がすることが

できる。

7 第一項から第三項まで及び第五項の申立ては、その申立てをすることができる事由が生じた日から五年以内にならなければならない。

8 第二項又は第五項の申立てについては、その告知を受けた日から一週間の不変期間内に、その裁判所書記官の所属する裁判所に異議を申し立てることができる。

9 第一項から第三項まで及び第五項の申立て並びにその申立てについての裁判又は裁判所書記官の処分並びに前項の規定による異議の申立て及びその異議の申立てについての裁判に關しては、その性質に反しない限り、非訟事件手続法第二編の規定（同法第二十七条及び第四十条の規定を除く。）を準用する。

**（再使用証明）**

第十条 前条第一項から第三項まで及び第五項の申立てにおいて、第八条の規定により納めた収入印紙を当該裁判所における他の手数料の納付について再使用したい旨の申出があつたときは、金銭による還付に代えて、還付の日から一年以内に限り再使用をすることができ旨の裁判所書記官の証明を付して還付すべき金額に相当する収入印紙を交付することができる。

2 前項の証明の付された収入印紙の交付を受けた者が、同項の証明に係る期間内に、当該収入印紙を提出してその額に相当する金額の金銭の還付を受けた旨の申立てをしたときは、同項の裁判所は、決定で、当該収入印紙の額に相当する金額の金銭を還付しなければならぬ。

3 前条第九項の規定は、前項の決定について準用する。

**第二節 手数料以外の費用**

第十一条 次に掲げる金額は、費用として、当事者等が納めるものとする。

一 裁判所が証拠調べ、書類の送達その他の民事訴訟等における手続上の行為をするため必要な本章に定める給付その他の給付に相当する金額

二 証拠調べ又は調停事件以外の民事事件若しくは行政事件における事実の調査その他の行為を裁判所外で行う場合に必要の裁判官及び裁判所書記官の旅費及び宿泊料で、証人の例により算定したものに相当する金額

2 前項の費用を納めるべき当事者等は、他の法令に別段の定めがある場合を除き、申立てによ

つてする行為に係る費用についてはその申立人とし、職権でする行為に係る費用については裁判所が定める者とする。

**（予納義務）**

第十二条 前条第一項の費用を要する行為については、他の法律に別段の定めがある場合及び最高裁判所が定める場合を除き、裁判所は、当事者等とその費用の概算額を予納させなければならない。

2 裁判所は、前項の規定により予納を命じた場合においてその予納がないときは、当該費用を要する行為を行わないことができる。

**（郵便切手等による予納）**

第十三条 裁判所は、郵便物の料金又は民間事業者による信書の送達に関する法律（平成十四年法律第九十九号）第二条第六項に規定する一般信書便事業者若しくは同条第九項に規定する特定信書便事業者の提供する同条第二項に規定する信書便の役務に関する料金に充てるための費用に限り、金銭に代えて郵便切手又は最高裁判所が定めるこれに類する証券（以下「郵便切手等」という。）を予納させることができる。

（裁判所書記官が行う手続に係る費用に関する特例）

第十三条の二 次に掲げる手続で裁判所書記官が行うものに係る費用についての第十一条第二項及び前二条の規定の適用については、これらの規定中「裁判所」とあるのは、「裁判所書記官」とする。

**一 督促手続**

二 訴訟費用、和解の費用又は非訟事件（他の法令の規定により非訟事件手続法の規定を準用することとされる事件を含む。）、家事事件若しくは国際的な子の奪取の民事上の側面に關する条約の実施に関する法律（平成二十五年法律第四十八号）第二十九条に規定する子の返還に関する事件の手続の費用の負担の額を定める手続

三 民事執行法第四十二条第四項に規定する執行費用及び返還すべき金銭の額を定める手続

四 少額訴訟債権執行（民事執行法第六十七條の二第二項に規定する少額訴訟債権執行をいう。以下同じ。）の手続

**第三節 費用の取立て**

第十四条 第十一項の費用で予納がないものは、裁判、裁判上の和解、調停若しくは労働

審判によりこれを負担することとされた者又は民事訴訟等に関する法令の規定により費用を負担すべき者から取り立てることができる。

**（予納がない場合の費用の取立て）**

第十五条 前条の費用の取立てについては、第十条第二項の規定により費用を納めるべき者に対する場合にあつては記録の存する裁判所の決定により、その他の者に対する場合にあつては第一審の裁判所の決定により、民事執行法その他強制執行の手続に関する法令の規定に従い強力のある債務名義と同一の効力を有する。

2 第九条第九項の規定は、前項の決定について準用する。

**（訴訟上の救助により納付を猶予された費用の取立て）**

第十六条 民事訴訟法第八十三条第三項又は第八十四条の規定による費用の支払を命ずる裁判は、強制執行に關しては、執行力のある債務名義と同一の効力を有する。

2 民事訴訟法第八十五条前段の規定による費用の取立てについては、前条の規定を準用する。

第十七条 民事訴訟法以外の法令において準用する同法の規定により救助を受け納付を猶予された費用の取立てについては、前条の規定を準用する。

**第三章 証人等に対する給付**

**（証人の旅費の請求等）**

第十八条 証人、鑑定人及び通訳人は、旅費、日当及び宿泊料を請求することができる。ただし、正当な理由がなく、宣誓又は証言、鑑定若しくは通訳を拒んだ者は、この限りでない。

2 鑑定人及び通訳人は、鑑定料又は通訳料を請求し、及び鑑定又は通訳に必要な費用の支払又は償還を受けることができる。

3 証人、鑑定人及び通訳人は、あらかじめ旅費、日当、宿泊料又は前項の費用の支払を受けた場合において、正当な理由がなく、出頭せず、又は宣誓、証言、鑑定若しくは通訳を拒んだときは、その支払を受けた金額を返納しなければならない。

第十九条 民事訴訟法第二百八条第二項（これは公害紛争処理法（昭和四十五年法律第八号）第四十二条の三十二第二項の規定による説明者）の旅費の請求等

明者、民事訴訟法第八十七条第一項（これを準用し、又はその例による場合を含む。）の規定による審尋をした参考人及び事実の調査のために裁判所から期日に出席すべき旨の呼出しを受けた者は、旅費、日当及び宿泊料を請求することができる。

**（調査の囑託をした場合の報酬の支給等）**

第二十条 民事訴訟等に関する法令の規定により調査を囑託し、報告を求め、又は鑑定若しくは専門的な知識経験に基づく意見の陳述を囑託したときは、請求により、報酬及び必要費用を支給する。民事訴訟等に関する法令の規定により保管人、管理人若しくは評価人を任命し、又は換価その他の行為を命じたときも、他の法令に別段の定めがある場合を除き、同様とする。

2 民事訴訟法第三百三十二条の四第一項第一号の規定により文書（同法第二百三十一条に規定する物件を含む。）の送付を囑託したときは、請求により、当該文書の写しの作成に必要な費用を支給する。

3 第十八条第三項の規定は、前二項の費用について準用する。

**（旅費の種類及び額）**

第二十一条 旅費は、鉄道賃、船賃、路程賃及び航空賃の四種とし、鉄道賃は鉄道のある区間の陸路旅行に、船賃は船舶の便のある区間の水路旅行に、路程賃は鉄道のない区間の陸路旅行又は船舶の便のない区間の水路旅行に、航空賃は航空機を利用すべき特別の事由がある場合における航空旅行について支給する。

2 鉄道賃及び船賃は旅行区間の路程に應ずる旅客運賃（はしけ賃及びさん橋賃を含むものとし、運賃に等級を設ける線路又は船舶による旅行の場合には、運賃の等級を三階級に区分するものについては中級以下で裁判所が相当と認める等級の、運賃の等級を二階級に区分するものについては裁判所が相当と認める等級の運賃）、急行料金（特別急行列車を運行する線路のある区間の旅行で片道百キロメートル以上のものには特別急行料金、普通急行列車又は準急行列車を運行する線路のある区間の旅行で片道五十キロメートル以上のものには普通急行料金又は準急行料金）並びに裁判所が支給を相当と認める特別車両料金及び特別船室料金並びに座席指定料金（座席指定料金を徴する普通急行列車を運行する線路のある区間の旅行で片道百キロメートル以上のもの又は座席指定料金を徴する船舶

を運行する航路のある区間の旅行の場合の座席指定料金に限る。) によつて、路程賃は最高裁判所が定める額の範囲内において裁判所が定める額によつて、航空賃は現に支払つた旅客運賃によつて、それぞれ算定する。

(日当の支給基準及び額)

第二十二條 日当は、出頭又は取調べ及びそれらのための旅行(以下「出頭等」という。)に必要な日数に応じて支給する。

2 日当の額は、最高裁判所が定める額の範囲内において、裁判所が定める。

(宿泊料の支給基準及び額)

第二十三條 宿泊料は、出頭等に必要な夜数に応じて支給する。

2 宿泊料の額は、最高裁判所が宿泊地を区分して定める額の範囲内において、裁判所が定める。

(本邦と外国との間の旅行に係る旅費等の額)

第二十四條 本邦と外国との間の旅行に係る旅費、日当及び宿泊料の額については、前三條に規定する基準を参酌して、裁判所が相当と認めるところによる。

(旅費等の計算)

第二十五條 旅費(航空賃を除く。)並びに日当及び宿泊料の計算上の旅行日数は、最も経済的な通常の経路及び方法によつて旅行した場合の例により計算する。ただし、天災その他やむを得ない事情により最も経済的な通常の経路又は方法によつて旅行し難い場合には、その現によつた経路及び方法によつて計算する。

(鑑定料の額等)

第二十六條 第十八條第二項又は第二十二條第一項若しくは第二項の規定により支給すべき鑑定料、通訳料、報酬及び費用の額は、裁判所が相当と認めるところによる。

(請求の期限)

第二十七條 この章に定める旅費、日当、宿泊料、鑑定料その他の給付は、判決によつて事件が完結する場合においてはその判決があるまでに、判決によらないで事件が完結した場合においてはその完結の日から二月を経過した日までに請求しないときは、支給しない。ただし、やむを得ない事由によりその期限内に請求することができなかつたときは、その事由が消滅した日から二週間以内請求した場合に限り、支給する。

(裁判官の権限)

第二十八條 受命裁判官、受託裁判官又はその他の裁判官が証人尋問その他の手続を行なう場合

には、この章の規定による給付に関し裁判所が定めるべき事項は、当該裁判官が定める。ただし、当該裁判官が自ら定めることが相当でないとき、この限りでない。

(第三債務者の供託の費用の請求等)

第二十八條之二 民事執行法第五十六條第二項若しくは第三項又は滞納処分と強制執行等との手続の調整に関する法律(昭和三十三年法律第九十四号)第三十六條の六第一項(これを準用し、又はその例による場合を含む。)の規定により供託した第三債務者は、次の各号に掲げる費用を請求することができるものとし、その額は、それぞれ当該各号に定めるところによる。

一 供託するために要する旅費、日当及び宿泊料 第二條第四号及び第五号の例により算定した額

二 供託所に出頭しないで供託することができるときは、供託に要する書類及び供託金の提出の費用並びに供託書正本の交付を受けるために要する費用 提出又は交付一回につき第二條第十八号の例により算定した額

三 供託に要する書類及び供託の事情の届出の書類の作成の費用 供託又はその事情の届出一件につき最高裁判所が定める額

四 供託の事情の届出の書類の提出の費用 提出一回につき第二條第十八号の例により算定した額

五 供託に要する書類で官庁その他の公の団体の作成に係るものの交付を受けるために要する費用 交付一回につき第二條第七号の例により算定した額

2 前項の費用は、第二十七條の規定にかかわらず、供託の事情の届出をする時までに請求しないときは、支給しない。

3 第一項の費用は、供託金から支給する。(債務者の財産に関する情報の提供に要した報酬の請求等)

第二十八條之三 民事執行法第二百七條第一項又は第二項の申立てを認容する決定により命ぜられた情報の提供をした者は、報酬及び必要な費用を請求することができるものとし、その額は、最高裁判所が定めるところによる。

第四章 雑則

(郵便切手等の管理)

第二十九條 第十三條の規定により予納させた郵便切手等の管理に関する事務は、最高裁判所が指定する裁判所書記官が取り扱う。

2 前項の裁判所書記官の責任については、物品管理法(昭和三十一年法律百十三号)に規定する物品管理職員の責任の例による。

3 前二項に定めるもののほか、第一項の郵便切手等の管理について必要な事項は、最高裁判所が定める。

(最高裁判所規則)

第三十條 この法律に定めるもののほか、民事訴訟等における証人等に対する裁判所の給付の実施その他この法律の施行に關して必要な事項は、最高裁判所が定める。

附則 この法律は、別に法律で定める日から施行する。

附則 (昭和四七年六月三日法律第五二号) 抄

第一條 この法律は、公布の日から起算して三十日を超えない範囲内において政令で定める日から施行する。

附則 (昭和五〇年二月二七日法律第九四号) 抄

1 この法律は、海上航行船舶の所有者の責任の制限に関する国際条約が日本国について効力を生ずる日から施行する。

附則 (昭和五〇年二月二七日法律第九五号) 抄

第一條 この法律は、責任条約が日本国について効力を生ずる日から施行する。

附則 (昭和五四年三月三〇日法律第五号)

1 この法律は、(施行期日) 第四号)の施行の日(昭和五十五年十月一日)から施行する。

(経過措置) 2 この法律の施行前に申し立てられた民事執行、企業担保権の実行及び破産の事件については、なお従前の例による。

3 前項の事件に關し執行官が受ける手数料及び支払又は償還を受ける費用の額については、同項の規定にかかわらず、最高裁判所規則の定めるところによる。

4 この法律の施行後に申し立てられた民事執行の事件に係るこの法律の施行前に生じた第四十

八條の規定による改正前の民事訴訟費用等に関する法律第二條第十三号及び第十四号に掲げる費用については、なお従前の例による。

附則 (昭和五四年三月三一日法律第一〇号)

1 この法律は、昭和五十四年四月一日から施行する。

2 この法律の施行前に要した費用については、なお従前の例による。

附則 (昭和五五年五月一七日法律第五〇号) 抄

1 この法律は、昭和五十五年十月一日から施行する。

附則 (昭和五五年五月一七日法律第五一号) 抄

1 この法律は、昭和五十六年一月一日から施行する。

附則 (昭和五五年五月二六日法律第六一号) 抄

1 この法律は、昭和五十五年十月一日から施行する。

(経過措置) 2 この法律の施行前にされた民事訴訟費用等に関する法律第九條第二項各号に掲げる申立てに係る手数料の還付については、なお従前の例による。

3 民事執行法の施行に伴う関係法律の整理等に関する法律(昭和五十四年法律第五号)附則第二項の規定により同法第四十八條の規定による改正前の民事訴訟費用等に関する法律(以下「旧法」という。)の規定によるものとされた旧法別表第一の上欄に掲げる申立てに係る手数料の額は、申立ての区分に応じ、それぞれ同表の下欄に掲げる額の三倍の額とする。

附則 (昭和五七年八月二四日法律第八二号) 抄

(施行期日) 1 この法律は、昭和五十七年九月一日から施行する。

(経過措置) 2 この法律の施行前に地方裁判所に訴えの提起があつた事件については、なお従前の例による。

附則（平成元年二月二二日法律第九号）抄

第一条 この法律は、公布の日から起算して二年を超えない範囲内において政令で定める日から施行する。

附則（平成三年一〇月四日法律第九〇号）抄

第一条 この法律は、公布の日から起算して一年を超えない範囲内において政令で定める日から施行する。

附則（平成四年六月五日法律第七二二号）抄

第一条 この法律は、公布の日から起算して六月を超えない範囲内において政令で定める日から施行する。

附則（平成八年六月二六日法律第一〇八号）抄

第一条 この法律は、公布の日から起算して三月を超えない範囲内において政令で定める日から施行する。

附則（平成八年六月二六日法律第一〇七号）抄

第一条 この法律は、新民訴訟法の施行の日から施行する。

附則（平成一〇年六月一五日法律第一二八号）抄

第一条 この法律は、平成十年十二月一日から施行する。

附則（平成一〇年一〇月一六日法律第一二八号）抄

第一条 この法律は、公布の日から起算して二月を超過した日から施行する。

附則（平成一一年二月一七七日法律第一五八号）抄

第一条 この法律は、公布の日から起算して二月を経過した日から施行する。

第一条 この法律は、公布の日から起算して六月を超えない範囲内において政令で定める日から施行する。

第二十五条 この法律の施行前に和議開始の申立てがあつた場合又は当該申立てに基づきこの法律の施行前若しくは施行後に和議開始の決定があつた場合においては、当該申立て又は決定に係る次の各号に掲げる法律の規定に定める事項に関する取扱いについては、この法律の附則の規定による改正後のこれらの規定にかかわらず、なお従前の例による。

附則（平成一二年一月二九日法律第一二九号）抄

第一条 この法律は、公布の日から起算して六月を超えない範囲内において政令で定める日から施行する。

附則（平成一三年四月一三日法律第三〇〇号）抄

第一条 この法律は、民間事業者による信書の送達に関する法律（平成十四年法律第九十九号）の施行の日から施行する。

附則（平成一四年七月三一日法律第一〇〇号）抄

第一条 この法律は、民間事業者による信書の送達に関する法律（平成十四年法律第九十九号）の施行の日から施行する。

附則（平成一四年七月三一日法律第一〇〇号）抄

第一条 この法律は、民間事業者による信書の送達に関する法律（平成十四年法律第九十九号）の施行の日から施行する。

附則（平成一五年七月一六日法律第一〇八号）抄

第一条 この法律は、会社更生法（平成十四年法律第五十四号）の施行の日から施行する。

附則（平成一五年七月一六日法律第一〇八号）抄

第一条 この法律は、公布の日から起算して一年を超えない範囲内において政令で定める日から施行する。

附則（平成一五年七月一六日法律第一〇八号）抄

第一条 この法律は、公布の日から起算して一年を超えない範囲内において政令で定める日から施行する。

附則（平成一五年七月二六日法律第一〇九号）抄

第一条 この法律は、公布の日から起算して一年を超えない範囲内において政令で定める日から施行する。

附則（平成一五年七月二五日法律第一二八号）抄

第一条 この法律は、平成十六年四月一日から施行する。ただし、次の各号に掲げる規定は、当該各号に定める日から施行する。

一 略  
二 第三条（民事訴訟費用等に関する法律第四十一条第二項及び第七項の改正規定を除く。）及び第二章並びに附則第三条から第五条までの規定 平成十六年一月一日

第三条 この法律は、公布の日から起算して六月を超えない範囲内において政令で定める日から施行する。

附則（平成一五年八月一日法律第一三八号）抄

第一条 この法律は、公布の日から起算して九月を超えない範囲内において政令で定める日から施行する。

附則（平成一五年八月一日法律第一三八号）抄

第一条 この法律は、公布の日から起算して九月を超えない範囲内において政令で定める日から施行する。

附則（平成一五年八月一日法律第一三八号）抄

第一条 この法律は、公布の日から起算して九月を超えない範囲内において政令で定める日から施行する。

附則（平成一五年八月一日法律第一三八号）抄

第一条 この法律は、公布の日から起算して九月を超えない範囲内において政令で定める日から施行する。

附則（平成一五年八月一日法律第一三八号）抄

第一条 この法律は、公布の日から起算して九月を超えない範囲内において政令で定める日から施行する。

第三債務者の供託について適用し、一部施行日前にされた第三債務者の供託については、なお従前の例による。

2 新費用法第二十八条の二第一項第一号の規定は、一部施行日以後に出發する供託のための旅行について適用し、一部施行日前に出發した供託のための旅行については、なお従前の例による。

附則（平成一五年八月一日法律第一三四号）抄

第一条 この法律は、公布の日から起算して一年を超えない範囲内において政令で定める日から施行する。

附則（平成一五年八月一日法律第一三四号）抄

第一条 この法律は、公布の日から起算して九月を超えない範囲内において政令で定める日から施行する。

附則（平成一五年八月一日法律第一三四号）抄

第一条 この法律は、公布の日から起算して九月を超えない範囲内において政令で定める日から施行する。

附則（平成一五年八月一日法律第一三四号）抄

第一条 この法律は、公布の日から起算して九月を超えない範囲内において政令で定める日から施行する。

附則（平成一五年八月一日法律第一三四号）抄

第一条 この法律は、公布の日から起算して九月を超えない範囲内において政令で定める日から施行する。

附則（平成一五年八月一日法律第一三四号）抄

第一条 この法律は、公布の日から起算して九月を超えない範囲内において政令で定める日から施行する。

附則（平成一五年八月一日法律第一三四号）抄

第一条 この法律は、公布の日から起算して九月を超えない範囲内において政令で定める日から施行する。

項、第五項第八項、第十六項及び第二十一項、第八項第三項並びに第十三条において「新破産法」という。）の施行の日から施行する。

(政令への委任)

第十四条 附則第二条から前条までに規定するもののほか、この法律の施行に關し必要な経過措置は、政令で定める。

附則 (平成一六年六月九日法律第八四号) 抄

第一条 この法律は、公布の日から起算して一年を超えない範囲内において政令で定める日から施行する。

附則 (平成一六年六月一八日法律第一二〇号) 抄

第一条 この法律は、平成十七年四月一日から施行する。

(経過措置の原則)

第二条 この法律による改正後の裁判所法、民事訴訟法、民事訴訟費用等に関する法律、特許法、実用新案法、意匠法、商標法、不正競争防止法及び著作権法の規定(罰則を除く。)は、この附則に特別の定めがある場合を除き、この法律の施行前に生じた事項にも適用する。ただし、この法律による改正前のこれらの法律の規定により生じた効力を妨げない。

附則 (平成一六年六月一八日法律第一二四号) 抄

第一条 この法律は、新不動産登記法の施行の日から施行する。

附則 (平成一六年一月一七日法律第一四〇号) 抄

第一条 この法律は、平成十七年一月一日から施行する。

附則 (平成一六年一月二三日法律第一五二号) 抄

第一条 この法律は、公布の日から起算して一年を超えない範囲内において政令で定める日から施行する。ただし、次の各号に掲げる規定は、当該各号に定める日から施行する。

一 附則第二十八條の規定中民事訴訟費用等に関する法律(昭和四十六年法律第四十号)第三條第二項第一号の改正規定 労働審判法

(平成十六年法律第四十五号)の施行の日又はこの法律の施行の日のいずれか遅い日(民事訴訟費用等に関する法律に関する経過措置)

第二十九条 この法律の施行の日が労働審判法の施行の前日である場合には、同法の施行の前日までの間における民事訴訟費用等に関する法律第三條第二項の規定の適用については、同項中「第三百九十七條第三項」とあるのは、「第三百九十八條第一項(同法第四百二條第二項において準用する場合を含む。）」とする。

第四十條 附則第三條から第十條まで、第二十九條及び前二條に規定するもののほか、この法律の施行に關し必要な経過措置は、政令で定める。

附則 (平成一七年六月二九日法律第七五号) 抄

第一条 この法律は、公布の日から起算して一年を超えない範囲内において政令で定める日から施行する。

附則 (平成一七年七月二六日法律第八七号) 抄

第一条 この法律は、公布の日から起算して一年を超えない範囲内において政令で定める日から施行する。

附則 (平成一九年七月二一日法律第一一三号) 抄

第一条 この法律は、公布の日から起算して六月を経過した日から施行する。

附則 (平成二三年五月二五日法律第五三号) 抄

第一条 この法律は、新非訟事件手続法の施行の日から施行する。

附則 (平成二五年六月一九日法律第四八号) 抄

第一条 この法律は、条約が日本国について効力を生ずる日から施行する。

附則 (平成二五年六月二六日法律第六一号) 抄

第一条 この法律は、公布の日から起算して三月を超えない範囲内において政令で定める日から施行する。

附則 (平成二五年七月三日法律第七二号) 抄

(施行期日) 1 この法律は、公布の日から起算して六月を経過した日から施行する。

附則 (平成二五年二月二一日法律第九六号) 抄

第一条 この法律は、公布の日から起算して三年を超えない範囲内において政令で定める日から施行する。

附則 (令和元年五月一七日法律第二二号) 抄

第一条 この法律は、公布の日から起算して一年を超えない範囲内において政令で定める日から施行する。ただし、次の各号に掲げる規定は、当該各号に定める日から施行する。

一 附則第二十条の規定 公布の日(政令への委任)

第二十条 この附則に規定するもののほか、この法律の施行に關し必要な経過措置は、政令で定める。

附則 (令和元年五月三一日法律第一八号) 抄

第一条 この法律は、二千一年の燃料油による汚染損害についての民事責任に関する国際条約及び二千七年の難破物の除去に関するナイロビ国際条約が日本国について効力を生ずる日から施行する。

附則 (令和四年五月二五日法律第四八号) 抄

第一条 この法律は、公布の日から起算して四年を超えない範囲内において政令で定める日から施行する。ただし、次の各号に掲げる規定は、当該各号に定める日から施行する。

一 第三條の規定並びに附則第六十條中商業登記法(昭和三十八年法律第百二十五号)第五十二條第二項の改正規定及び附則第百二十五條の規定 公布の日

二 第一條の規定、第四條中民事訴訟費用等に関する法律第二十八條の第二項の改正規定及び同法別表第一の一七の項イ(イ)の改正規定(「取消しの申立て」の下に、「秘匿決定を請求する申立て、秘匿事項記載部分の閲覧等の請求をすることができる者を秘匿決定に係る秘匿対象者に限る決定を求めるとして、

秘匿決定等の取消しの申立て、秘匿決定等により閲覧等が制限される部分につき閲覧等を行うことの許可を求めるとして」を加える部分に限る。)、第五條中人事訴訟法第三十五條の改正規定、第六條の規定並びに第九條中民事執行法第百五十六條の改正規定、同法第百五十七條第四項の改正規定、同法第百六十一條第一項の改正規定、同法第百六十一條の次に一條を加える改正規定、同法第百六十五條第一號の改正規定、同法第百六十六條第一項第一號の改正規定及び同法第百六十七條の第十四項の改正規定並びに附則第四十五條及び第四十八條の規定、附則第七十一條中民事保全法(平成元年法律第九十一号)第五十條第五項の改正規定、附則第七十三條の規定、附則第八十二條中組織的な犯罪の処罰及び犯罪収益の規制等に関する法律(平成十一年法律第百三十六号)第三十條第四項の改正規定及び同法第三十六條第五項の改正規定並びに附則第八十六條、第九十一條、第九十八條、第一百十二條、第百十五條及び第百十七條の規定 公布の日から起算して九月を超えない範囲内において政令で定める日(政令への委任)

附則 (令和四年六月一日法律第五九号) 抄

第一条 この法律は、公布の日から起算して一年を経過した日から施行する。ただし、次の各号に掲げる規定は、当該各号に定める日から施行する。

一 第一條中消費者契約法第十三條第五項の改正規定、同法第十四條第二項第八號の改正規定、同法第十八條の改正規定、同法第十九條の改正規定、同法第二十一條第四項の改正規定、同法第三十一條の改正規定、同法第三十二條の改正規定、同法第三十五條の改正規定、同法第五十條の改正規定、同法第五十一條の改正規定、同法第五十二條第一項の改正規定及び同法第五十三條の改正規定並びに第二條の規定並びに次條第五項から第七項まで並びに附則第三條、第四條及び第七條から第九條までの規定 公布の日から起算して一年





項ハの規定の適用については、同項ハ中「申立て、スマートフォンにおいて利用される特定ソフトウェアに係る競争の促進に関する法律第三十六條第一項若しくは第三十七條第一項の規定による申立て」とあるのは、「申立て」とする。  
 (政令への委任)  
**第八條** この附則に定めるもののほか、この法律の施行に関し必要な経過措置は、政令で定める。

別表第一(第三條、第四條関係)

<p>上欄                  訴え(反訴を除く。)の提起</p>	<p>下欄                  訴訟の目的の価額に、次に定めるところにより算出した額(一)訴訟の目的の価額が十億を超過する部分の額(二)千円</p>
--	---

<p>(三) 訴訟の目的の価額が五百万円を超過する部分の額(四)千円</p>	<p>(五) 訴訟の目的の価額が十億円を超過する部分の額(六)千円</p>	<p>二 控訴の提起(四の項に掲げるものを除く。)</p>	<p>三 上告の提起又は上告受理の申立て(四の項に掲げるものを除く。)</p>	<p>四 請求について判断をしなかつた判決に対する控訴の提起又は上告の提起若しくは上告受理の申立て</p>	<p>五 請求の変更</p>
<p>一の項に算出た額</p>	<p>一の項に算出た額</p>	<p>一の項に算出た額</p>	<p>一の項に算出た額</p>	<p>一の項に算出た額</p>	<p>一の項に算出た額</p>

六 反訴の提起

てにののる訴かこてにるじのそ本だ額で算に二のてにのるに控にた判つ(一)のた控の手にのの変額で算に二のてにののる訴かこてにるじのそ本だ額で算に二のてにのるに控にた判つ(一)のた控の手にのの変額で算に二の





基礎と (五) 円千と 二百ご	基礎と (四) 円八 百に	基礎と (三) 円四 百に	基礎と (二) 円二 百に	基礎と (一) 円 百に
民事調停法による調停の申立て又は労働審判法による労働審判 手続の申立て		借地借家法第四十一条の事件の申立ての変更		

求める	審判を	は労働	調停又	(三) 百	に	で	万	額	その	の部分	円	五	を	百	価	事	求	審	は	調	(二) 円	ご	円	額	そ	部分	ま	百	価	事	求	審	は	調	(一) 得	出	よ	こ	め	次	応	価
-----	-----	-----	-----	-------	---	---	---	---	----	-----	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	-------	---	---	---	---	----	---	---	---	---	---	---	---	---	-------	---	---	---	---	---	---	---

で	万	額	そ	の	部分	円	五	を	十	億	額	が	事	求	審	は	調	(四) 百	ご	円	額	そ	部分	ま	十	を	千	億	額	が	事	求	審	は	調	停	又	円	千	と	ま	十	億	額	が
---	---	---	---	---	----	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	-------	---	---	---	---	----	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---

<p>二の五一 家事事件手続法別表第二に掲げる事項についての審判、同法第二百四十四条に規定する事件についての調停若しくは国際的な子の奪取の民事上の側面に関する条約の実施に関する法律第三十二条第一項に規定する子の返</p>	<p>五一 家事事件手続法別表第一に掲げる事項についての審判の申立て又は同法の規定による参加の申出（申立人として参加する場合に限る。）</p>	<p>二の四一 民事調停法による調停の申立て又は労働審判法による労働審判手続の申立ての変更</p>	<p>に千円四 （六） 調停又は労働審判を求めるとの事項の価額が五十億円を超える部分の価額千円ごとにごとに</p>
<p>千二百円</p>	<p>八百円</p>	<p>変更後の申立ての申立に四より算出した額から変更前の申立てに係る手数料の額を控除した額</p>	<p>円</p>

<p>七一 （イ）民事訴訟法の規定による特別代理人の選任の申立て、弁護士でない者を訴訟代理人に選任することの許可を求める申立</p>	<p>二の六一 第二項の債権届出</p>	<p>六一 イ 仲裁法第十二条第二項、第十六条第三項、第十七条第二項から第五項まで、第十九条第四項、第二十条、第二十三条第五項又は第三十五条第一項の規定による申立て、民事執行法第二百五十五条第一項、第二百六条第一項又は第二百七条第一項若しくは第二項の規定による申立て、非訟事件手続法の規定により裁判を求めるとして、配偶者からの暴力の防止及び被害者の保護等に関する法律（平成十三年法律第三十一号）第十条第一項から第四項まで又は第十条の二の規定による申立て、国際的な子の奪取の民事上の側面に関する条約の実施に関する法律第二百二十二条第一項の規定による申立て、消費者の財産的被害等の集団的な回復のための民事の裁判手続の特例に関する法律第十三条の申立てその他の裁判所の裁判を求めるとして、基本となる手続が開始されるもの（第九条第一項若しくは第三項又は第十條第二項の規定による申立て及びこの表の他の項に掲げる申立てを除く。） ロ 非訟事件手続法の規定による参加（一三の項に掲げる参加を除く。）の申出（申立人として参加する場合に限る。）</p>	<p>選立事件の申立て又はこれらの法律の規定による参加の申出（申立人として参加する場合に限る。）</p>
<p>五百円</p>	<p>債権に つき千</p>	<p>一個の</p>	<p>千円</p>

て、忌避の申立て、訴訟引受けの申立て、秘密記載部分の閲覧等の請求をすることができるときを当事者に限る決定を求める申立て、その決定の取消しの申立て、秘匿決定を求める申立て、秘匿事項記載部分の閲覧等の請求をすることができるときを秘匿決定に係る秘匿対象者に限る決定を求めるとして、秘匿決定等の取消しの申立て、秘匿決定等により閲覧等が制限される部分につき閲覧等を行うことの許可を求める申立て、裁判所書記官の処分に対する異議の申立て、訴えの提起前における証拠保全の申立て、受命裁判官若しくは受託裁判官の裁判に対する異議の申立て、手形訴訟若しくは小切手訴訟の終局判決に対する異議の申立て、少額訴訟の終局判決に対する異議の申立て又は同法の規定による強制執行の停止、開始若しくは続行を命じ、若しくは執行処分の取消しを命ずる裁判を求めるとして、

（ロ）非訟事件手続法又は国際的な子の奪取の民事上の側面に関する条約の実施に関する法律の規定による忌避の申立て、特別代理人の選任の申立て、弁護士でない者を手続代理人に選任することの許可を求める申立て、裁判所書記官の処分に対する異議の申立て、これらの法律の規定による強制執行の停止、開始若しくは続行を命じ、若しくは執行処分の取消しを命ずる裁判を求めるとして又は受命裁判官若しくは受託裁判官の裁判に対する異議の申立て

（ハ）家事事件手続法の規定による忌避の申立て、特別代理人の選任の申立て、弁護士でない者を手続代理人に選任すること

の許可を求める申立て、裁判所書記官の処分に対する異議の申立て、同法の規定による強制執行の停止、開始若しくは続行を命じ、若しくは執行処分の取消しを命ずる裁判を求めるとして、受命裁判官若しくは受託裁判官の裁判に対する異議の申立て、財産の管理に関する処分の取消しの申立て、不在者の財産の管理に関する処分の取消しの申立て、遺産の管理に関する処分の取消しの申立て又は義務の履行を命ずる審判を求める申立て

ロ 執行裁判所の執行処分に対する執行異議の申立て、民事執行法第十三条第一項の代理人の選任の許可を求める申立て、執行文の付与の申立てに関する処分に対する異議の申立て、同法第三十六条第一項若しくは第三項の規定による強制執行の停止若しくは続行を命じ、若しくは執行処分の取消しを命ずる裁判を求めるとして、同法第四十一条第二項の規定による特別代理人の選任の申立て、同法第四十七條第四項若しくは第四十九條第五項の規定による裁判所書記官の処分に対する異議の申立て、執行裁判所に対する配当要求、同法第五十五条第一項の規定による売却のための保全処分若しくは同条第五項の規定によるその取消し若しくは変更の申立て、同法第五十六条第一項の規定による地代等の代払の許可を求める申立て、同法第六十二条第三項若しくは第六十四条第六項の規定による裁判所書記官の処分に対する異議の申立て、同法第六十八條の二第一項の規定による買受けの申出をした差押債権者のための保全処分の申立て、同法第七十七條第一項の規定による最高価買受申出人若

しくは買受人のための保全処分  
の申立て、同法第七十八條第六  
項の規定による裁判所書記官の  
処分に対する異議の申立て、同  
法第八十三條第一項の規定によ  
る不動産の引渡命令の申立て、  
同法第一百五條第一項の規定に  
よる船舶国籍証書等の引渡命令  
の申立て、同法第一百七條第一  
項の規定による強制競売の手續  
の取消しの申立て、同法第一百  
八條第一項の規定による船舶の  
航行の許可を求める申立て、同  
法第二百七條第一項の規定に  
よる差押物の引渡命令の申立  
て、少額訴訟債権執行の手續に  
おける裁判所書記官の執行処分  
に対する執行異議の申立て、少  
額訴訟債権執行の手續における  
裁判所書記官に対する配当要  
求、同法第六十七條の第十五  
第三項の規定による申立て、同  
法第七十二條第二項の規定によ  
る申立て、同法第七十五條第  
三項若しくは第六項の規定によ  
る申立て、同法第八十七條第  
一項の規定による担保不動産競  
売の開始決定前の保全処分若し  
しくは同条第四項の規定によるそ  
の取消しの申立て又は同法第九  
十條第二項の動産競売の開始  
の許可の申立て  
ハ 民事保全法の規定による保  
全異議の申立て、保全取消しの  
申立て、同法第二十七條第一項  
の規定による保全執行の停止若  
しくは執行処分の取消しを命ず  
る裁判を求める申立て、同法第  
四十二條第一項の規定による保  
全命令を取り消す決定の効力の  
停止を命ずる裁判を求める申立  
て又は保全執行裁判所の執行処  
分に対する執行異議の申立て  
ニ 参加（破産法、民事再生  
法、会社更生法（平成十四年法  
律第五十四号）、金融機関等  
の更生手續の特例等に関する法

律（平成八年法律第九十五号）、  
船舶の所有者等の責任の制限に  
関する法律（昭和五十年法律第  
九十四号）又は船舶油濁等損害  
賠償保障法（昭和五十年法律第  
九十五号）の規定による参加及  
び七の項、一三の項、一五の  
項、一五の二の項又は一六の項  
に掲げる参加を除く。）の申出  
又は申立て  
ホ 破産法第八十六條第一項  
の規定による担保権消滅の許可  
の申立て、同法第九十二條第  
三項の規定による商事留置権消  
滅の許可の申立て、同法第二十  
四十八條第一項の規定による免  
責許可の申立て若しくは同法第  
二百五十六條第一項の規定によ  
る復権の申立て、民事再生法第  
百四十八條第一項の規定による  
担保権消滅の許可の申立て、行  
政事件訴訟法の規定による執行  
停止決定の取消しの申立て若し  
しくは仮の義務付け若しくは仮の  
差止め等の義務の取消しの申立  
て、労働組合法（昭和二十四年  
法律第七十四号）第二十七條  
の二十の項の規定による申立て、配  
偶者からの暴力の防止及び被害  
者の保護等に関する法律第十六  
條第三項若しくは第十七條第一  
項若しくは第三項の規定による  
申立て、借地借家法第四十四條  
第一項ただし書の規定による弁  
護士でない者を手續代理人に選  
任することの許可を求める申立  
て、労働審判法第四條第一項た  
だし書の規定による弁護士でな  
い者を代理人に選任することの  
許可を求める申立て、特定債務  
等の調整の促進のための特定調  
停に関する法律第七條第一項若  
しくは第二項の規定による民事  
執行の手續の停止若しくは続行  
を命ずる裁判を求める申立て、  
人事訴訟法（平成十五年法律第  
百九号）第三十九條第一項の規

八一	定による申立て、特許法（昭和 三十四年法律第二百一十一号）第 百五條の二の三第一項、第五百 條の四第一項若しくは第五百五 條の五第一項の規定による申立 て、著作権法（昭和四十五年法 律第四十八号）第一百四十四條の六 第一項若しくは第一百四十四條の七 第一項の規定による申立て、不 正競争防止法（平成五年法律第 四十七号）第十条第一項若しく は第十一条第一項の規定による 申立て、私的独占の禁止及び公 正取引の確保に関する法律（昭 和二十二年法律第五十四号）第 八十一條第一項若しくは第八十 二條第一項の規定による申立 て、種苗法（平成十年法律第八 十三号）第四十條第一項若しく は第四十一條第一項の規定によ る申立て、家畜遺伝資源に係る 不正競争の防止に関する法律 （令和二年法律第二十二号）第 十一條第一項若しくは第十二條 第一項の規定による申立て又は 仲裁法第四十九條第七項の規定 による申立て へ 執行官の執行処分又はその 遅延に対する執行異議の申立て ト 最高裁判所の規則の定め による申立てのうちイ又はロに掲 げる申立てに類似するものとし て最高裁判所が定めるもの	(一) 一の の項、一五 の項又は一 六の項に掲 げる申立て につ いての裁判 （抗告裁判所 の裁判を含む。） に対するもの	それぞ れの申 立ての 手数料 の額の 一・五 倍の額
----	---	---	---

九一	民事訴訟法第三百四十九條第一 項、非訟事件手続法第八十三條 第一項、家事事件手続法第三百 三條第一項若しくは国際的な子の 奪取の民事上の側面に関する条 約の実施に関する法律第九十九 條第一項の規定による再審の申 立て又は同法第一百七條第一項 の規定による終局決定の変更の 申立て	(4) (1)か ら(3)まで 以外のもの	千五百 円	する法律第百 十一條第二項 の規定による 抗告の許可の 申立て について の裁判（不適法と して却下した ものを除き、 抗告裁判所の 裁判を含む。） に対するもの	た額の 一・五 倍の額
----	--	-----------------------------	----------	--	-------------------

別表第二（第七條関係）

一	上欄	事件の記録の 閲覧、謄写又 は複製（事件 の係属中に当 事者等が請求 するものを除 く。）	一件につき五百五十 円
二	下欄	事件の記録の 正本、謄本又 は抄本の交付	用紙一枚につき五百五十 円

四	三 事件に関する 事項の証明書 の交付
執行文の付与 一通につき三百円	一件につき百五十円（事 件の記録の写しについて 原本（事件の記録が電磁 的記録で作成されている 場合にあつては、当該電 磁的記録に記録された情 報の内容を書面に出力し たときのその書面。以下 同じ。）の記載と相違ない 旨の証明に係るものにつ いては、原本十枚までご とに百五十円）